

栗真小だより



令和4年5月9日発行

心のこもったあいさつのできる子に！

朝、昇降口に立って子どもたちを迎えています。

「おはようございます」とあいさつすると、「おはようございます」と元気な声が返ってきます。はずかしそうに「おはようございます」とあいさつする子やなかなか自分からあいさつできない子もいますが、自分から大きな元気な声で「おはようございます」と言ってくれる子が何人もいます。中には、あいさつだけでなく会釈してあいさつしてくれる子もいます。あいさつをされると、わたしもいい気分になって「よーし、今日もがんばろう！」という気持ちになります。心のこもったあいさつとはそういうものなんですね。



あいさつは大切なしつけ！



そもそもあいさつとは、「自分の心を積極的に開いて、その心に近づく・迫る」という意味があるそうですが、私たちはごく普通のこととして、幼い頃からあいさつをしてきました。しかし、あいさつは、その意味を考えると、人と関わる上で大切な役割を持っていて、各家庭での大切なしつけの1つだと思います。

「しつけ」という漢字は「躰」と書きますが、この字は、「国字」といって日本でできた漢字だそうです。「躰」の意味は、広辞苑によると、「①礼儀作法を身につけさせること。また、身についた礼儀作法。」「②縫い目を正しく整えるために仮にざっと縫い付けておくこと。」「③稲の苗を正しく曲がらないように植え付けることから、田植え」とあります。「躰」は「習気」という字から変わったようですが、文字から言えば「しつけ」は、「礼儀作法」等について美しい言動を身につけさせるために「練習・訓練」することで、礼儀・作法が身につくと、その人の身体が美しくなることを示しているようにも思えます。そう考えてみれば、「躰」は人間が社会で生きていくための大事な資質だと思います。

大人の責任！ つもりのしつけ

先日、ある本で「つもりのしつけ」という一文を目にしました。『私たち大人は、子どもたちに「あいさつしなさい」と毎日のように言っているから十分にしつけているつもりになっているが、実際に子どもがあいさつできていないとしたら、本当にしつけていることにならない。』と書いてありました。「つもりのしつけ」では、社会で生きていくための大事な資質を身に付けられずに、子どもたちは大人になることとなります。この文に私も親として、ドキッとさせられました。私たち親は、大人の責任として、子どもの姿をしっかりと見届けながらじっくり「本当のしつけ」をしていかなければならないと思います。



上手な子どものしつけ方！

ベネッセ教育情報サイトを見ていたら、「上手な子どものしつけ方～5つのポイントをご紹介～」というサイトを見つけましたので、一部を紹介します。

ポイント1 「～しなさい」ではなく「～しようね」に語尾を変えてみる。

ポイント2 「～しないでね」ではなく「～してね」と「やってはいけないこと」を言うのではなく、「やってほしい具体的行動内容」伝える。

ポイント3 「やらなかったことを叱る」のではなく「できたことをほめる」

ポイント4 大声ではなくできるだけ落ち着いた声で話しかける。

ポイント5 こんなときは叱っても OK

「けがにつながる命にかかわるような危険なことをした場合」

ーベネッセ教育情報サイトよりー



今回は、子どもたちのあいさつの様子から、「しつけ」について、考えてみました。子どものしつけは親の大切な役割ですが、家庭・地域・学校がそれぞれの場で、子どもの姿をていねいに見届けながら、「本当のしつけ」ができるよう連携して取り組んでいければと思います。